

木と共にご生きた

細田安治

■ 3 ■

細田美三郎 名倉から細田へ

さて、細田家について記す。
細田美三郎、つまり私の祖父は名倉藤三郎の三男として1863年(文久3年)4月10日、静岡県引佐郡気賀村(細江町)に生まれた。1885年(明治18年)に細田かつと入夫結婚し、新家を興し細田姓を名乗ることになった、これらが細田家の始まりである。2人の間には五男四女に恵まれ、一人も欠けることなく成人させたことは家庭人としても立派であった。



父の細田三郎

祖父は1895年(明治28年)、33歳で漢学の教師として栃木県宇都宮中学(旧制)を皮切りに長野中学、神戸一中、鹿児島中学、岡山県関谷中学、高知一中(現追手前高校)、神戸市立滝川中学と転動した。1931年(昭和6年)に退官するまでの36年間、英・数・国・漢

といわれ下位の教科とみなされたなかを、漢学一筋に中学子弟教育に打ち込んだ。

39年(同14年)77歳のとき、半畝と号し喜寿に際しては「自賀」詩をつくり、掛け軸にして各家庭に与えた。自らの一生を顧み「余生は天の与えるところ、大いに楽しむべし」と老生の意気盛んなところを見た。

44年(同19年)12月26日、82歳、病篤く死期の迫ったころは日米開戦のさなかで、充分な治療も受けられず生まれ故郷の気賀で息を引き取った。思えばさ

細田姓の始まりと細田木材創業者・父三郎の父

の時代。
店は南砂町2丁目、現第四砂町小学校前の借家だった。製材は千石大横川沿いの吉橋製材所で賃挽きした。後に、この工場を買って取り、細田三郎製材所が正式に船出した。

創業者 父・細田三郎

私の父・細田三郎は美三郎とかつの三男として1906年(明治39年)1月1日、兵庫県神戸市神戸加納町で生まれた。

23年(大正12年)、17歳で青雲の志をもって上京し、東京・深川にて叔父・伊東広十郎氏の経営する塩

浜木工所(現在の平住製材)に奉公入りした。伊東家は細田からみれば

主人筋に当たり、事業を教えたにすぎたことが現在の細田木材の始まりである。歴代社長はじめ副社長、事務ほか幹部の方々には大変お世話になってい

東から東へ独立

26年(昭和元年)ごろ、義兄・伊東豊(塩浜木工場副社長)は東を旗印に独立したが、まもなく健康を害し引退したため、父は東を引きついで独立した。31年(同6年)11月3日、25歳

し、父は瀕死の重傷を負い日本に送り返された。もし、この事故にあわなければフィリッピンから生きて帰っては来られなかったであろう。

焼け野が原の木場で

一番に工場を動かした
45年(同20年)3月10日の東京大空襲で工場全焼したが、いち早く工場を再開した。木場広しといえども、細田が一番に工場を動かした。

焼けた沈没船から焼玉エンジンを引き上げ、手入れて動力にし、ベルトをつなぎ合わせて丸鋸を動かした。この画期的なできごとは当時日本放送協会(現NHK)の労働の時間で放送された。いち早く工場を動か

し焼け野が原の復興に努めた。戦後は、復興特需、朝鮮動乱特需、オリンピック景気などが続いた。

先を見ることに敏な父は、いち早く製材から木工そして人工乾燥、ツナ板、天然木化粧合板、集成材へと展開を図る事業を多角化した。

また、常に次を見据えた事業展開は、実父とはいえ心から尊敬する偉大な親父であり、名経営者であった。

しかし、父は若い時からの無理が祟り心臓不整脈から血拴を患い、闘病生活を余儀なくされ、74年(同49年)1月16日永眠した。

前日の伊東・細田両家の新年会では普段寡黙な父が、このほかに機嫌で、乾杯を重ね、与謝野晶子の「妻を娶らば才長けて……」と歌いだし、細田の代表として挨拶を始め周囲を驚かせた。後になって思えばこれが今生の別れの挨拶であった。

翌日の16日突然の心筋梗塞のため永眠した。

偉大な父の教訓

「木材業は天職。人の嫌がることにチャンスがある。倒れて後やむ。資源有限だ。加工度を高め有効利用しなければならぬ。人様の為になることを率先して行動しよう。お客様の拍手伝いをしよう。先を見通せ。考えは大きく」などの精神は、現在の社是として引き継いでおり、事あるごとに社員一同で唱和し心に刻んでいる。
偉大な父よ、安らかに眠りください。

3人の三郎

先祖のことを書きだすと一冊の本ができるほど歴史は長く、前回でも書いたが、清和源氏を源流に源氏から新田と分か

れ、再び結ばれ遠江名倉となる。五代目長兵衛と名倉藤三郎は、一身を顧みず人のため世のために尽くした。結果として、財をなしたが、これも私することなく地域のため、人のために尽くした。

藤三郎は教育者として名を成し、地域から尊敬されている。名倉美三郎は名倉から細田に入夫、新家を興した細田の元祖だ。漢学を普及させた教育者として立派な人物だ。

三郎は、事業家として成功した不屈の精神で細田の基礎を造った。こうした先祖の事績をしっかりと心に刻み、後世に伝えるのが我々世代の責務だと思

う。
殊に藤三郎、美三郎、三郎の三代にわたる三人の三郎は細田の源流である。先祖の功績を無駄にすることなくより精進せねばならない。常々念じている。

■ 次回11日付 ■
(細田木材工業(株)会長)

日刊木材新聞主催で日本橋高層ビルで開催された「木文化の展示会」での細田製材の会社案内(1949年12月)